「若い建築士こそ伝統木造を学んでほしい」

地元富山県で大工と庭師を養成する専門学校の講師を続けて１５年目。開校当初は親の仕事を継ぐ高校卒業直後の学生がほとんどだったかが、最近では女性の一級建築士、定年退職を控えた年配者、外国の職人など、金物を使わない伝統木造技術に関心をもつ人が幅広くなっていると感じる。

いま日本の伝統的木造建築を復活するために必要なことは木造建築物の検査制度のレベルを上げること。これまでの検査員は、木造建築を深く理解せずに、金物があるかないか、きちんと締まっているかなど、誰でもできる検査能力しか要求されなかった。

だが本来伝統木造の良し悪しを見極めるには、下小屋の段階で継手仕口を検査できる人材がいなければ評価できない。

いま一番伝統木造を学んでほしいのは若い建築士。機会があればぜひ、現行の基準法を把握した、やる気のある建築士を対象に、いったんそこから離れて、１年をかけて伝統木造をみっちりと伝えていきたい。これによって墨付け、刻みができ、かつ図面も書ける。そういう人材を養成したい。

私はいま６７歳。徒弟制度を経験した最後の世代として、いま伝えていかなければいけないという焦りがある。こうした状況を国も少しずつ理解してもらえればありがたい。